

広島洋楽普及における広島高等師範学校の役割

—吉田信太に焦点を当てて—

大迫 知佳子

序

広島高等師範学校は、1902/M35年4月1日に勅令第98号により「師範学校、中學校、高等女學校ノ教師タルベキ者ヲ養成スル」（広島高等師範學校 1904: 23）目的で創設された。

本校が創設された明治期における洋楽普及に関しては、この時期に音楽科教員養成の拠点となっていた音楽取調掛、東京音楽学校、そして東京女子高等師範学校の果たした役割に焦点が当てられてきた。また、これらの機関で養成された教員達による、（現在のいわゆる）地方都市への洋楽普及に関しても考察はなされているが、ごくわずかな都道府県を除いてその詳細の解明には至っていない（坂本 2000-02, 谷口；森田 2010-11）。一方、広島官立学校における洋楽普及については、主として大正期以降の広島高等師範学校附属小学校（三村 2007 等）¹の教員達の果たした役割が中心的な論題となってきた。これらの研究が、音楽科教育実践と密接な関連を持つ教育学分野で行われてきたこと、そして戦前の広島高等師範学校には音楽科教員養成課程が設置されていなかった（鈴木 2003: 58, 61）ために、専門的な音楽教育の場として重要視されてこなかったことが、その理由として考えられる。しかし、広島高等師範学校は全人教育の観点から、創設以降音楽教育に力を注いできた（菅 2002）。従って、本校が西洋音楽の普及に果たした役割は決して過小評価されるべきものではない。

本稿では、主として明治期・大正期の広島高等師範学校が、広島における洋楽普及に果たした役割を、広島高等師範学校初代音楽教授²の吉田信太という人物に関する次の3つの観点、すなわち、1) 彼が受けた洋楽教育、2) 彼が行った広島高等師範学校における音楽教育、そして3) 彼が設立した丁未音楽会を通して考察する。

1. 吉田信太が受けた洋楽教育

まずは、吉田信太が広島で行った洋楽普及の背景にある、彼が受けた洋楽教育について検討しよう。吉田は、1870/M3年2月26日、宮城県仙台市に生まれ、1954/S29年12月24日に没した日本の作曲家である。彼は、1891/M24年から1894/M27年まで東京音楽学校で、音楽と音楽科教育に関する基礎教育を受けた。その際、吉田は洋楽に関する知識と経験を習得したわけだが、その習得は、主として次の2つの存在、すなわち学科課程と外国人教師の存在という2つに支えられていたと考えられる。

東京音楽学校は、1887/M20年10月5日に開校（官報告示10月4日）した。吉田は本科師範部を卒業したが、この本科師範部には、1年間の豫科での基礎教育の後、「音楽教員ニ適當ナルモノ」が試験を経て進級することができた。本科の教育は2年であり、彼が受けたと考えられる豫科本科の計3年間の学科課程は表1のとおりである。表1で網掛けをつけた部分に見られるように、例えば豫科本科での3年間を通して、毎週2~3時間の英語の授業が行われ、豫科ではピアノ、本科ではヴァイオリン、西洋音楽史など西洋音楽関連の科目を相当時間数履修することになっており、在学中3年間で

¹ 音楽科教育分野の研究においては、主として欧米の音楽科教育思想・教材の受容、すなわち日本における音楽科教育へのそれらの反映という観点から研究が行われている。

² 教授の記述（細川；片山 2008: 663, 広島高等師範学校 1951: 78）と、助教授の記述（広島高等師範学校創立八十周年記念事業会 1982: 87）あり。

洋楽に関する知識や、演奏・作曲技術の十分な習得が行われたことが窺える。

表 1 吉田在学中の東京音楽学校學科課程
(財団法人 芸術研究振興財団 1987: 461-463 を元に大迫作成)

豫科學科課程

學科	期間	時数/週
倫理 倫理要旨	1年間	1
唱歌 單音唱歌	同	10
洋琴 右手左手練習, 双手練習	同	9
音樂論 樂典 寫譜法	同	3
文學 和漢文	同	3
英語 讀力 會話	同	2
體操, 舞蹈 徒手運動, 練聲運動, 方舞演習	同	2

本科師範部學科課程

學科	期間	時数/週
第1年		
倫理 倫理要旨	1年間	1
聲樂 高等單音唱歌 複音唱歌	同	8
器樂 風琴 觸擊法, 發相法等, 樂曲練習	同	10
バイオリン 「バイオリン」生徒ハ四時間ヲ欠ク	同	4
姿勢, 用弓法, 手指運用法 樂曲練習		
音樂論 音樂理論	同	2
音樂史 本邦及歐州音樂史	同	2
文學 詩歌學, 作歌	同	2
英語 讀力, 作文, 文法	同	3
體操, 舞蹈 徒手運動, 練聲運動, 方舞演習	同	2
第2年*		
倫理 倫理要旨	同	1
聲樂 諸重音唱歌	同	8
器樂 風琴 觸擊法, 發相法等, 樂曲練習	同	10
バイオリン 姿勢, 用弓法, 手指運用法 樂曲練習	同	10
箏 調絃法, 單彈法, 複彈法初歩	同	2
音樂論 和聲大意	同	2
英語 讀方, 作文, 文法	同	2
教育 教育學大綱 唱歌教授法	同	3
體操, 舞蹈 徒手運動, 練聲運動, 方舞演習	同	2

* 明治26年の改正により、2年時に3時間の文學と、2時間の音響學が追加された。

加えて吉田への洋楽教育で、重要な役割を果たしたと考えられるのが、同校御雇外国人教師ルードルフ・ディットリヒ (Rudolf Dittrich 1861-1919) である。ディットリヒは1861/B (文久) 元年オーストリア生まれの音楽家であり、ウィーン音楽院で、ブルックナーらによる音楽教育を受けたのち、吉田の在籍期間中である1888/M21年～1894/M27年の間、東京音楽学校でヴァイオリン、和声学、作曲法、唱歌の教授を担当した(財団法人 芸術研究振興財団 1987: 513)。演奏面におけるディットリヒの活躍も非常に意欲的で、彼は日本滞在中に五十回を超える大小の演奏会に出演し、当時の音楽界に大きな刺激を与えたといわれている(財団法人 芸術研究振興財団 1987: 514)。校長伊澤修二の内外的音楽融合の理想に従って雇われられた当時の東京音楽学校外国人教師は「ヨーロッパの伝統を正確に伝える」(財団法人 芸術研究振興財団 1987: 511) 役割を担ったと言われており、ディットリヒが授業において、また演奏会を通して、十分な洋楽教育を行ったことは明らかである。

吉田の入学のおよそ1年前、1890/M23年5月には、音楽用のホールすなわち奏楽堂が据えられた東京音楽学校の新校舎が完成している。奏楽堂は、日本最初の演奏会場として、明治期の洋楽受容において中心的な役割を果たした場所のひとつであったとも認識されている。従って、奏楽堂での演奏会における洋楽作品の演奏や視聴を通して、吉田が洋楽作品に関する知識を培った可能性もあるが、落成から吉田卒業までの期間の演奏会記録はなく、現時点でそれを確定することはできなかった。

従って、①洋楽に関する知識・技術・経験を習得するための学科課程、②それらを正確に伝える目的で雇われられた外国人教師による授業と演奏会という2つによって、吉田の中に洋楽の知識と経験が培われたと考えられる。

2. 広島高等師範学校における音楽教育

2-1. 明治～大正初期の広島高等師範学校規則

上述した洋楽に関する教育的背景とともに、吉田は広島高等師範学校でその普及を行うこととなる。まずは、彼が同校に在任していた時期、つまり開校から大正初期の広島高等師範学校における音楽教育の位置付けについて検討する。『広島高等師範学校一覽』の「第一章 広島高等師範学校規則」では、次のように定められている。

第一章 第三條 本校の學科ヲ豫科、本科、研究科二分テ豫科ノ修業年限ハ一箇年本科ハ三箇年研究科ハ一箇年乃至二箇年トス (広島高等師範学校 1904: 23)

このうち、音楽については、豫科に関して、

第一章 第四條 豫科ノ科目ハ倫理、國語、漢文、英語、數學、論理、圖書、音樂、體操トス 師範學校出身ノ生徒ニハ圖書音樂ノ一科目若クハ二科目ヲ關キ其時數ヲ英語ニ加ヘ課スルコトアルベシ (広島高等師範学校 1904: 23)

と記されている。つまり、豫科において音楽は必修科目ではあるけれど、師範学校出身者は音楽の代わりに英語を学ぶという選択もあり得た、ということだ。豫科の学科課程は、「音楽 毎週時數 二 學科課程 唱歌及理論」(広島高等師範学校 1904: 24) となっている。一方、本科は国語漢文部、英語部、地理歴史部、数物科学部、博物学部という5つの部に分かれており、いずれの部においても「随意科目トシテ」音楽を選択することが可能であった(広島高等師範学校 1904: 24-6)。本科の学科課程は、「音楽 毎週時數 一学年 二 / 二・三学年 一 學科課程 唱歌樂器使用法」(広島高等師範学校 1904: 26 ページ後の表、ページ番号なし) となっており、吉田が退職した後も、1915/T4年まではこの規則が変更されることはなかった。従って、明治・大正初期の広島高等師範学校には、音楽(科) 教員を正規に養成する教育課程は未設立であり、音楽は豫科での準必修科目、及び本科での

選択科目として規定されていたことが分かる。吉田はこれらの規定に基づき、唱歌・理論・楽器法に関する教育を行っていたということになる。

2-2. 明治～大正初期の広島高等師範学校蔵の西洋音楽関連書

吉田が実際の授業において行った具体的な教育内容に関する資料はこれまでのところ見つからない。しかし、『広島高等師範学校和漢書分類目録』から其の一旦をうかがい知ることはできるだろう。この目録には、「大正十三年三月末現在本館所蔵ノ和漢書ヲ採録ス但附属中、小學校専用ノ圖書及一般閲覧ニ供セサル圖書等特殊扱ノモノハ之ヲ省ク」（広島高等師範学校 1925: ページ番号なし）という凡例が付されており、目録から、純粹に当時の教員・生徒が閲覧した可能性、つまり知識を得た可能性、あるいは授業で用いられた可能性がある西洋音楽関連書を窺うことができると考えられる。表 2 にはこの目録に記載された西洋音楽関連書をまとめた。吉田の在任中に出版されたものには網掛けを施した。これらは少なくとも吉田らによって選定され、生徒はこれらの本から洋楽に関する知識を得られる状態にあった、ということは確かである。なお、1905/M38年には広島高等師範学校教育研究会という研究会が発会したことも判明したが、明治～大正初期におけるこの研究会の講演集には、残念ながら調査した限りにおいて、西洋音楽に関する論題はみられなかった。

表 2 『広島高等師範学校和漢書分類目録』における西洋音楽関連書
(広島高等師範学校 1925: 866-871 を参考に大迫作成)

書名	筆者	出版年	冊類	号
甲種 總説乃雜著				
音楽の發達と其民族の特性	佛, コンバリウ, 米, フォールクナー合著 田邊尚雄譯 (興亡史論三卷ノ内)		ク	九七五
新編音楽理論	鈴木米次郎譯補	明治二五	一 ナ	五八
近世音楽の發達概観	英, ヘンダーソン著 田邊尚雄譯 (興亡史論續編二卷ノ内)			一〇二八
近代音楽家評傳	佛, ロラン著 尾崎喜八譯	大正五	一 ナ	四五二
俗通 西洋音楽講話	田邊一尚雄譯	大正四	一 ナ	三八六
西洋音楽史	石倉小三郎 (帝國百科全書一三六編)	明治三十八	一 ク	四〇九
西洋音楽史綱	富尾木知佳	大正五	一 ナ	三八七
ベートーフェンの一生	久保正夫	大正八	一 ナ	四五二
乙種 聲樂	該当なし			
丙種 器樂				
小學唱歌集用オルガンピアノ樂譜	東京音楽學校編	明治三二	一 ナ	八六
ヴァイオリンの正しいひき方	煤木光太郎 再版	大正九	一 ナ	四五五
洋琴教則本	奥好義編 五版	明治三五	一 ナ	九〇
丁種 雅樂	該当なし			
戊種 俗樂	該当なし			

*表は、目録の引用のため、年号の併記は行わない(原文に併記がないため)。

3. 丁未音楽会

豫科と本科での音楽教育の他に、吉田が行った洋楽普及の場となったのが、丁未音楽会である。本稿では、『永懐 広島高等師範学校五十年史』および『追懐 広島高等師範学校創立八十周年記念』に見られる丁未音楽会について整理する。丁未音楽会は1906/M39年12月に、校友会の附属団体として吉田によって組織され、音楽教育に関する講演や定期的演奏公演、ならびに1年に1回の大会を開催した（広島高等師範学校創立八十周年記念事業会 1982: 33）。発会式は1907/M40年1月20日に行われ、第1回演奏会に関しては1907/M40年1月20日説（広島高等師範学校創立八十周年記念事業会 1982: 87）及び、1921/T10年8月1日説（広島高等師範学校 1951: 69）の2説が見られた。音楽会のメンバーの回想記からは、音楽の教授が中心となり、音楽会の活動を通して、洋楽の普及が行われていたことが窺える。具体的には、音楽会がクラシック音楽の同好会であったこと、ハイドン、ベートーヴェン、モーツァルトなどの曲を演奏したこと、演奏旅行があったこと、外国人を含む、世界的に高名な音楽家達が招かれたことなどが記載されていた。さらに、注目すべきは、この回想記には、呉の軍楽隊による指導のために合宿が行われたこと、広島県立高等女学校（現在の広島県立広島皆実高校）で演奏したこと、広島放送局にて放送を依頼されたことという3点に関する記述が見られたことである。これに加えて本報告書集における光平氏の報告では、広島女学校（広島女学院）の生徒達の丁未音楽会への参加も示唆されている。つまり、今回のラウンドテーブルで扱った4つの機関が、丁未音楽会という会を通してその普及に関する役割を連携させていた可能性がある、ということである。

4. まとめおよび今後の課題

今回の3観点による検討から、それぞれ、次の3つのことが明らかとなった。つまり、1) 吉田信太は、東京音楽学校における和洋音楽融合という教育理念に沿った教育課程と外国人教師を通して洋楽に関する知識・技術・経験を得たこと、2) それらを広島高等師範学校豫科及び本科における唱歌・理論・楽器法に関する音楽教育によって啓蒙するとともに、3) 広島高等師範学校の校友会の附属団体として丁未音楽会を組織し、実際の西洋音楽作品を一般に普及させる活動の基礎を築いたことの3点である。そして、これらの活動を通して、広島高等師範学校が洋楽を普及する機関としての重要な役割を担い得ていたことは自明である。さらに今回の調査からは、丁未音楽会を通して、軍楽隊・放送局・広島女学院・高等師範学校が関連を持ち、広島における洋楽普及を行っていたことも窺えるのである。

これらの解明点を踏まえ、①明治期以降の広島高等師範学校における音楽教育と丁未音楽会の詳細、②丁未音楽会を通じた他の3機関との連携の詳細および、③洋楽普及における広島（県）師範学校の役割および広島高等師範学校との関連を解明し、洋楽普及における広島高等師範学校・広島（県）師範学校の役割を総合的に考察することを今後の課題とする。

引用文献および主要参考文献

- 千葉優子 2007 『ドレミを選んだ日本人』 東京：音楽之友社
広島高等師範学校（編） 1904 『広島高等師範学校一覽 從明治三十六年 至明治三十七年』 広島：広島高等師範学校
広島高等師範学校 1915 『広島高等師範学校一覽 從大正四年 至大正五年』 広島：広島高等師範学校
広島高等師範学校（編） 1925 『広島高等師範学校和漢書分類目録』 広島：広島高等師範学校：全2巻
広島高等師範学校（編） 1951 『永懐 広島高等師範学校五十年史』 広島：広島高等師範学校

- 広島高等師範学校創立八十周年記念事業会（編） 1982 『追懐 広島高等師範学校創立八十周年記念』 広島：広島高等師範学校創立八十周年記念事業会
- 広島高等師範学校丁未音楽会（編） 1911 『丁未音楽会講演集 第1輯』 大阪：開成館
- 広島高等師範学校丁未音楽会（編） 1911 『丁未音楽会講演集 第2輯』 大阪：開成館
- 細川周平；片山杜秀（監修） 2008 『日本の作曲家—近現代音楽人名事典』 東京：日外アソシエーツ株式会社
- 三村真弓 1997 「大正期から昭和初期における広島高等師範学校附属小学校に見られる音楽教育観」 『中国四国教育学会教育学研究紀要』 第二部, 第43巻: 271-276.
- 三村真弓 2007 「山本壽の音楽鑑賞教育観」 『広島大学大学院教育学研究科音楽文化教育学研究紀要』 第19巻: 1-16.
- 奥中康人 2008 『国家と音楽 伊澤修二がめざした日本近代』 東京：春秋社
- 坂本麻実子 2000-02 「明治時代の師範学校への音楽教員の配置：東京音楽学校卒業生の勤務校の調査から」 『富山大学教育学部紀要』 54: 49-61.
- 坂本麻実子 2005 「明治時代における東京女子高等師範学校の音楽教員養成機能」 『桐朋学園大学研究紀要』 31: 49-66.
- 菅真城 2002 「五十年史編集室だより（18）広島高等師範創立百周年」 『広大フォーラム』 34期3号, No. 372.
- 鈴木 慎一郎 2003 「高等師範学校,女子高等師範学校における音楽教員養成—東京女子高等師範学校,広島女子高等師範学校体育科での『体育・音楽教員養成』を中心として—」 関西楽理研究会『関西楽理研究』 通号20号: 58-65.
- 鈴木 慎一郎 2006 『昭和前期の師範学校における音楽教育実践に関する史的研究』 兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科 博士論文
- 谷口昭弘；森田信一 2010-11 「明治期の富山における西洋音楽の受容：文献調査による唱歌教育を中心とした歴史の再構築」 『富山大学人間発達科学部紀要』 5(1): 101-111.
- 寺田貴雄 1999 「大正期の音楽鑑賞教育におけるアメリカの音楽鑑賞教育の影響—Victor Talking Machine 社刊 Music Appreciation for Little Children (1920) の受容の諸相」 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科『音楽教育学研究論集』 第1巻: 54-65.
- 財団法人 芸術研究振興財団 東京芸術大学百年史刊行委員会（編） 1987 『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇 第一巻』 東京：音楽之友社

大迫 知佳子（おおさこ ちかこ：日本学術振興会海外特別研究員 / ブリュッセル自由大学客員研究員 / tonarino116@yahoo.co.jp)